

《目的》人間集団の中において、着用している服装が場の雰囲気に対応しい、あるいは相応しくないと感ずることがある。これは、どのような集団状況の時に起きるものであるのかを、人形を用い、服装比によるモデル実験から検討した。本研究は自分自身が集団の中で感じる「場違い感」という視点に立ち、また空間構成要因の影響を取り除くため無背景の場として行った。

《方法》実験試料として26cmの人形36体と衣服を6種用意し、その衣服の中から2種ずつ組合せて着装させた。それらを縦横1.8mのグレー板の上にランダムに配置し、スライド撮影を行った。この試料の内、服装組合せ7組、各組服装比35:1から1:35までの中から18パターンを選定し、各々両方の服装について評価するため計252回スライドを提示した。評価尺度は場違い度が「ない」「わずかにある」「ややある」「かなりある」「非常にある」の5段階である。なお、被験者は女子大学生59名であり、実験は1997年7月に行った。

《結果》2種の組合せが「Gパンと着物」「Gパンとスカート」などのように、相手方が異なると、同じ「Gパン」でも場違い感の評価値に差がみられる。また服装2種の人数比が同数であっても、その評価値は同じになるとは限らず、特に「着物」はいずれの組合せにおいても場違い度は相対的に低く、例えば「Gパンと着物」の場合、「Gパン18:着物18」での「着物」の場違い度と、「Gパン22:着物14」での「Gパン」の場違い度が同じ評価値であった。集団の場において感じる服装の場違い感は、周囲の状況によって変化する、すなわち相対的なものであることが示唆された。